

ゼミナールⅠ

「演劇の〈ことば〉を考える」

国際日本学部 日本文化学科 3年

宮崎 亜美

国際日本学部日本文化学科の深澤ゼミは、日本の伝統演劇から西洋の演劇まで、演劇そのものを研究対象とするゼミです。主な活動として、演劇に関する本を精読して演劇に対する理解を深めたり、実際に劇場に赴いて観劇したりしています。今年度は、河竹登志夫による『演劇概論』（東京大学出版会、1978）を用書に定め、演劇を構成する本質的な要素について学びました。また、課外活動として、赤坂の草月ホールで行われた音楽座ミュージカル『ラブ・レター』、駒場のこまばアゴラ劇場で行われた第27班『ハヴ・ア・ナイス・ホリデー』という二作品を鑑賞しました。本報告では、『演劇概論』の精読と『ラブ・レター』の鑑賞という二つの活動についてまとめます。

『演劇概論』は、演劇を総合的に捉えた概論書です。内容は章ごとに分かれていて、演劇観の総論、演劇を構成する諸要素についての各論、日本と世界の演劇史について述べられています。今年度は演劇観の総論と



「音楽座ミュージカル」（於：赤坂草月会館）観劇のあとで

演劇を構成する要素についての各論までの内容を中心に精読しました。ゼミでは、当日までに決められた範囲を読み、自分の考えや疑問をまとめておきます。そして、当日、自分の考えと先生の考えと照らし合わせたり、疑問について先生と討議したりしています。加えて、文中で登場した演劇の戯曲や関連する論文を読んだりもします。例えば、演劇分類について学んだ際には、具体例として登場したイプセンの『人形の家』を読みました。この活動によって、演劇に対する理解が深まるほか、文章を批判的な態度で読む力や戯曲を読む力が身に付きます。

音楽座ミュージカル『ラブ・レター』は、原作である浅田次郎の短編小説をミュージカル化した作品です。この作品は人とのつながりを繊細に描いていて、舞台上で役者たちが紡ぐストーリーには心を揺さぶられました。観劇を終えた後は、それぞれの印象に残ったシーンや工夫されていたと思うシーンなどを話し合います。この意見交換は、自分にはない発想を聞くことができ、作品の理解を深めることにもつながるため、非常に充実しています。また、実際に劇場に赴いて観劇すると、演劇の一瞬性を肌で感じるができます。こうした経験は、研究室で本や論文を読んでいるだけでは得られないもので、演劇を研究する上で必要な経験だと私は思います。

以上、深澤ゼミの活動内容についてまとめました。演劇は扱えるテーマが幅広く、大変なこともあります。が、先生が親身になつて相談に乗ってくれるため、自分の興味関心に沿った研究に取り組むことができます。また、観劇など普段できない体験ができることもこのゼミナールの魅力です。

文献講読演習「曾我物語を読む」（担当教員・深澤徹）活動報告

2022年度の「文献講読演習」では、NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にちなみ、半年かけて曾我の五郎・十郎の敵討ちを題材とした『曾我物語』のテキストを原文で通読しました。そのからみで、6月5日には一日かけて、舞台となった鎌倉の街をフィールドワークしました。『曾我物語』はまた、能や歌舞伎の「曾我もの」演目としてアレンジされてもいるので、7月10日には、演劇のメッカとして知られた下北沢の街の近くにある「駒場アゴラ劇場」で、劇団「第27班」による「ハヴ・ア・ナイス・ホリデー」という演目を鑑賞して、現代の演劇空間を体験しました。

これら二つの活動の後は、最寄りの飲食店で飲み食いしながら（コロナ感染拡大の前です）、楽しく振り返りの時間を持ちました。以下は参加者による、それぞれの体験記です。

* * *

◆早坂葵 深澤ゼミでは曾我物語をテキストとして読み進めてきたが、視点を少し変えるだけで物語はその表情を変え、私達に新鮮な体験をさせてくれる。真名本や仮名本を読み比べながら、意見を交換し合う楽しさをこのゼミを通して学ぶことが出来た。実際に自分の足で史跡を巡り、作品をより身近に感じていくことは物語を深く味わうことに繋がるのである。

私達は今回フィールドワークの一環として、こまばアゴラ劇場へと出向いた。鑑賞した芝居のタイトルは「Have a nice holiday」。とてもありふれた言葉に見え

るが、その本当の意味に気付いた時、我々に寄り添ってくれる言葉へと変化していく。一つのステージ上で照明を切り替えながら幾つもの場面が進行していくのだが、観客に少しも違和感を覚えさせない演技に圧倒された。小劇場ならではの空気感が漂い、まるで一本の映画を観ているような感覚に陥らせる、そんな魅力があった。この作品も自分達が目見たからこそ得るものがあつたと強く感じる。

◆長谷川朱羽 過疎化した地域に移住した若者のみ手に入れることができる「不老薬」を得た若者たちが、時間に追われず自由に夢を抱いて生きることを選択した代償とは何かという作品内容であつた。医療技術の発達で「不老薬」の開発に直面の可能性がある現代に對して鋭い視点が向けられていた。「自由と愛は矛盾する」という台詞で、不老によつて自由な長い時間を得た故に愛による新たな命の誕生が犠牲になることに気づかされた。

また若者たちだけでなくハチという生命の登場で「子が生まれて親が死ぬ」という本来の生命原理の喪失は生命活動にとつての「休息」にあたるのではないかと問われたように感じられた。作品に登場する同性愛者や仕事に生きる人を現代社会の様々な立場の人と重ね合わせることで、現代がこの「生命活動の休息」に突入しつつあることを訴えるのが『ハヴァ・ア・ナイス ホリデー』の真意ではないかと思った。今回芝居を見たことで話の真意を考察する大切さを改めて学んだ。

◆雨宮裕貴 私は今回『ハヴァ・ア・ナイス・ホリデー』を鑑賞するにあたって、題名にもある「休日」が劇中でど

のように描かれるのかに注目していた。そして劇中で示された休日の意味とそれをもとに自分が考察したことがある。本作品における「休日」とは、「生物の本能的な仕事ともいえる、子孫を生み自らの遺伝子を残すという行いを休むこと」と説明されている。劇中では服用したものを不老にする不老薬と、それに伴う不妊症が登場している。特に子どもを残すことを仕事同然と考えていた「花の女」にとつてこの不妊症は「休日」なのであろう。

また、劇中には「踊る女」に同性の恋人がいたことが示されたり、「運ぶ男」と「歌う男」との間に同性愛的な表現が見られる。自分はこの同性愛に関する描写からも、生物における「休日」が読み取れると考えた。近年では同性愛に對する人々の見方も変わってきており、社会に受け入れられるようになった。しかし、同性同士のカップルは子孫を残すことはできない。同性愛という選択をとることで、生物の仕事である「遺伝子を残す」という行為をやすむこともまた、「休日」であるといえるだろう。なぜ、このような表現がされているのだろうか。

近年の日本では出生率の減少が深刻な問題として取り上げられている。これは一般的に悪いこととしてとらえられているし、実際に社会的には出生率が高いほうがいいだろう。しかし、この問題を生物における「休日」ととらえることで必ずしも悪い面だけではないというメッセージが込められているのではないのだろうか。

◆青木奈緒子 私たちは7月10日、文献購読演習のフィールドワークの一環としてこまばアゴラ劇場に『ハヴァ・ア・ナイス・ホリデー』という劇を見に行った。

この劇は、過疎化した地域でのみ若者が買えることが出来る、飲むと老化が止まる「不老薬」という薬を求め、村に集まった人々の物語である。少子化や過疎、愛などをテーマにした作品であり、かなり考えさせられる作品となっていた。特に劇中の会話で「相手のことを考えない愛情はただの迷惑である」や「自分の優しさを理由に現状から逃げていく」といった内容の言葉があり、会話はメインの場面ではなかったが、とても印象に残り、痛いところを突かれたような気がした。

その後の劇の感想会では、様々な感想や意見があつた中で、ハヴァ・ア・ナイス・ホリデーという題名の意味の、かなりの考察が上がるなど有意義なものとなった。映像ではない実際の舞台はプライベートでは中々行くことがないため、今回の授業を通して実際に見ることが出来て貴重な経験になった。



駒場アゴラ劇場で観劇



朝比奈切通しを探索中



鶴岡八幡宮社頭（狛犬さんもマスク）